

画中画に大原美術館の歴史

キャンバス3枚組みの大画面中央に描かれているのは、それまた3枚組みの絵画。右端には赤い服の女性がいる。絵を見つめ、手元にはノートがあり思索にふけっている。画中画を描いた人物という想像がつく。



久松知子「物語との距離（2018、夏、倉敷）」＝大原美術館提供
縦2.59m×横1.62mのキャンバス3枚組み

本作は、画家の久松知子(27)が、岡山県倉敷市の大原美術館が続けている若手作家の滞在制作プログラム(愛称・ARKOⅡアルコ)に選ばれ、6月から約3カ月間かけて倉敷で制作してきた。拠点は、大原美術館の

コレクション収集に奔走した画家、児島虎次郎の旧アトリエ無為村荘)。今回、そのアトリエ自体も題材になった。赤い服の女性は、久松の自画像だ。

久松は、日本の近現代美術にかかわる要人を批評的精神を込めて描いた「日本の美術を埋葬する」(2014年)の成果で岡本太郎現代芸術賞岡本敏子賞や絹谷幸二賞奨励賞を受賞した。現在、東北芸術工科大学大学院博士課程在学中。美術館ゆかりの人物を交えた歴史画を描きたいと、ARKOに応募したという。

1930年に開館した大原美術館は、近代日本における西洋美術受容史を今に伝える存在だ。地元の実業家である大原孫三郎が、児島に作品収集を託したこと、開館後も幾多の著名美術家や評論家が当地に集まったことは広く知られている。まさに久松にとって題材の宝庫。だが倉敷入りした後、悩んだと彼女は語る。「大上段に歴史を描くことに抵抗を持ってしまった」

画中画は、歴史画における伝統スタイルの一つ。この構想に基く3枚組みキャンバスを準備したが、「私が影響を受ける『三』を取り入れ、あえて小さな物語を描こう」と思い直した。アトリエの環境を取り込む、入れ子状の画面構成にしたのである。画中画には、美術館の建物を

中央に、左側には孫三郎と児島

右側には現在の美術館を支えるメンバーと、美術館の歴史に刻まれる50年のシンポジウムに出席した柳宗悦らが描かれている。だが展示室では、詳細な説明はしていない。「美術館の歴史に関する認識は人によって差があります。これまで、私の絵を面白いと言ってくれた人は美術史に詳しい人が多かったのですが、今回は誰を描こうと、絵自体が自立するようにと、意識して突き放すようにしました」

制作の途中、7月の西日本豪雨に遭遇した。アトリエに被害はなかったものの、救助ヘリや救急車の音が周辺に響いた。しかも酷暑。この日々をどう刻印するか。犠牲者が出たことを報じる地元紙の一面を描き込んだ。「まだ被書の全容が分からない段階です。瞬発的に自分のリアリティーとして描きました」と久松は振り返る。

美術館の誕生も、その後のシンボも、自身の滞在制作も豪雨も、一つの歴史として関係し合っている。次世代へとつながっていく。絵の中の物語と意識的に距離を置く試みをした結果、そんな手応えもあったのだろう。新聞の小さな描写に、画家の覚悟を見いだした。

11月11日まで。11月5日休館。
大原美術館(086・422・0005)。
【岸桂子】